

# その7 招提

(平成5年7月1日号—第165号)

今回ご紹介する招提[しょうだい]<sup>\*1</sup>。この地名の意味をご存じでしょうか。辞書によると、仏教用語で世界をわが家として世間にとらわれることなく、自由に修業をしている僧のこと<sup>\*2</sup>をいい、奈良の唐招提寺の寺名にあらわれていると書かれています。



10 敬応寺(招提元町3丁目)

招提は、戦国時代、寺内町[じないまち]だったことが歴史に残っています。寺内町というのは浄土真宗の寺を中心に形成された集落のことで、集落全体が境内とみなされ、年貢を免除されるという特権がありました。天文12年(1543)8町四方(1町は約100メートル)の境内に中心となる道場(後の敬応寺・招提元町3丁目)を建てるとき、1つの石を掘り出し、その石に「招提寺内」の銘があったところから地名がついたという話もあります。当時の招提村は、道場を中心に東は長尾

から西は渚のあたりまでの東西30町、北は船橋から南は田口までの南北21町であったとされています。

約40年間、寺内町として発展しましたが、天正10年(1582)山崎の合戦で明智光秀に味方をしたため特権を奪われ、一般の農村に編入されてしまいました。

戦乱の世とともに揺れ動いた招提村の歴史に思いをはせながら、敬応寺周辺を散策してみてもはいかがでしょうか。



11 招提元町3丁目

<sup>\*1</sup> 昭和50年から大字招提に住居表示が施行され、「招提」の読みは「しょうだい」とされた。国語辞典等にも「しょうだい」と表記されるが、地元では「しょだい」と呼ぶ人が多い。元龜元年(1570)に織田信長が招提に宛てた朱印状を初め、天正16年(1588)の長束正家・増田長盛連名の書状などには「しよたい」(近世以前の仮名遣いでは拗音を小さくせず、濁点を付さないことが多い。)と記されており、江戸時代の文書には「諸大」の文字を宛てた例(招提村片岡家文書)もあることから、どうやら「しょだい」と呼んでいたようである。

<sup>\*2</sup> あるいは、こうした僧が住む寺院を意味する。